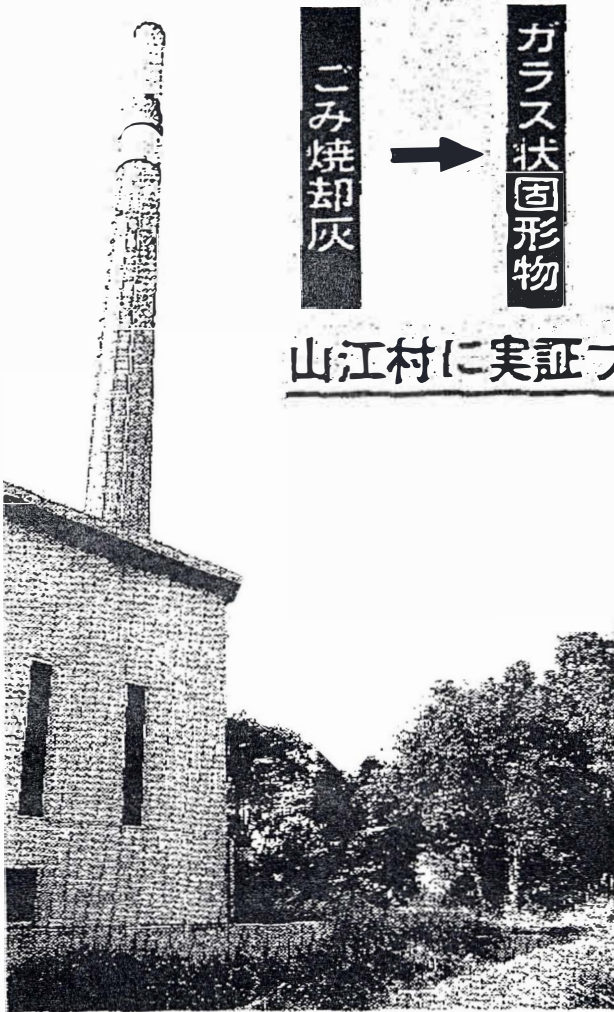


ご注意
過去に当社が原情報を著作した新聞・雑誌等の記事は、画面上の閲覧のみが可能です。これら記事は過去に公開されたものですが、現状で利用する際には著作権等が発生する場合があります。利用をご検討の方は当社にご相談願います。
日本環境保全株式会社

溶融炉実証プラントが建設される山江ごみ処理施設焼却炉わきの用地（球磨郡山江村）



ごみ焼却灰 → ガラス状固形物



焼却灰を溶融炉で高温で溶かして急激に冷却したもの。砂粒大のガラス状に変化し「溶融スラグ」と呼ばれる

山江村に実証プラント建設へ

茨城県のごみ処理システム開発業者が人吉球磨広域行政組合（代表・福永浩介人吉市長）の「山江ごみ処理施設」（球磨郡山江村）に、焼却炉から出た灰を溶かして無機質のガラス状固形物に変える新型焼却灰高温溶融炉の実証プラントを建設することになった。十一月末には着工の予定で、同施設の焼却灰を使って実用化のための実験を行う。

ダイオキシン抑制に期待感

ごみ焼却時に発生するダイオキシン対策が急務になっており、厚生省は排煙については規制に乗り出したが、現在埋め立てられている焼却灰のダイオキシン対策は手付かずの状態。実用化されれば、ダイオキシン抑制に役立つものとみられる。

建設するのは、日本環境保全（本社茨城県牛久市、古渡岡作社長）。新型炉は茨城大工学部などと共同開発した。同組合が協力を承諾、今月初旬に覚書を取り交わした。

プラントは山江ごみ処理施設北側の約五百平方メートル敷地に建設。費用は約八億円。同組合は土地、冷却用水を提供、焼却灰を供給する。ガラス固形物（溶融スラグ）は、将来かわらなど材料として商品化される可能性があり、同組合が保管する。実験期間は平成十一年四月から十一年四月まで。千時間連続運転などで実用性を調べる。

同社によると、既存の溶融炉との違いは①炉は約六十立方メートル極めて小型で小規模のごみ処理施設でも対応できる②厚生省が許可すれば廃油を燃料に使える③安価であることなど。

「ごみ処理問題に詳しい民間の環境監視研究所（大阪市）の中地重晴さんは「データを示されないとなんとも言えない。コスト面も排煙処理や燃料費まで勘案する必要があり、全体を見て判断する必要がある」と話す。

山江ごみ処理施設で出る焼却灰は日量約八ト。人吉市鬼木町の最終処分場に埋められているが、すでに満杯近くに達している。同社は、溶融スラグにすることで重さが約三分の一、体積が約五分の一に減らせると試算しており、同組合は「実用化されれば、実験終了後、プラントをそのまま使用することも検討したい」と話している。